

【2018 年度決算説明会】 質疑応答概要

※説明会における主な質疑応答をご紹介します。

<日 時>	2019 年 5 月 17 日 (金) 10:00 ~ 11:30
<出席者>	明治ホールディングス(株) 代表取締役社長 川村 和夫 明治ホールディングス(株) 取締役常務執行役員 塩崎 浩一郎 (株)明治 代表取締役社長 松田 克也 Meiji Seika ファルマ(株) 代表取締役社長 小林 大吉郎

Q1:2019 年 4 月に牛乳類を値上げしましたが、現在の販売状況について教えてください。

A1:お取引様にご理解いただきながら、値上げはスムーズな形で浸透しています。当初想定していた値上げによる物量減の影響は現段階では少ないと感じていますし、市場全体でも値上げによる大きな影響はないのではないかと認識しています。

Q2:プロバイオティクスヨーグルトは 2018 年度は減収となりましたが、その背景を教えてください。

また、2019 年度の販売回復に向けてどのような施策を計画していますか。

A2:2018 年度にプロバイオティクスヨーグルトが減収となった要因は、健康志向の対象となる商品がヨーグルト以外にも様々出てきていることが背景にあると分析しています。販売回復に向けて、2019 年度はコミュニケーション施策を効果的に投入していきます。また、2019 年 5 月 27 日より「明治プロビオヨーグルト PA-3」を機能性表示食品としてリニューアル発売しますので、この機会に再度店頭におけるプロバイオティクスヨーグルト 3 品それぞれの特長を訴求していきたいと考えています。

Q3:ヨーグルトの 2019 年度計画では、ブルガリアヨーグルト以外の商品が 100 億円以上増収となる計画となっていますが、新たなコンセプトの商品の発売などを計画しているのですか。

A3:2019 年度は「明治 THE GREEK YOGURT」や「明治ヨーグルトドルチェとろけると」などの新商品で新しいヨーグルトの価値を提案しながらヨーグルトのリーディングカンパニーとして市場全体を活性化していきたいと考えています。

Q4:医薬品セグメントでインドのメドライク社を 2018 年度に減損した背景について教えてください。

A4:メドライク社は 2014 年に買収しましたが、原薬の高騰やインドにおける人件費の高騰に加え、英国でのジェネリック医薬品事業の先行き不透明感などで、買収時に想定していた業績との乖離が生じたため、今回のれんの一時償却を実施しました。しかしながら、売上構成比の 9 割を占める受託製造・開発ビジネスは、主要顧客である大手グローバル製薬企業からもコスト面と品質レベルで高い評価をいただいております。今後着実に伸長すると考えております。

Q5:2020 中期経営計画の営業利益目標 1,250 億円は 2019 年度計画からは 170 億の増益となりますが、食品セグメントと医薬品セグメントそれぞれの 2020 年度の増益に向けたポイントを教えてください。

A5:1,250 億円の内訳は食品セグメントが 1,100 億円、医薬品セグメントが 150 億円が当初の計画ですが、医薬品セグメントは 2019 年度の計画を 185 億円としましたので、200 億円が射程圏内に入ってきていると考えています。一方で、食品セグメントは 2019 年度目標の 900 億円をまずクリアすることが 1,250 億円の達成に向けた大きなポイントとなります。

食品セグメントでは、プロバイオティクス、チョコレート、ザバスなどのコア商品群において、新商品の投入や生産体制の整備により増益を図っていきます。また、チーズでも新商品を計画しており、増益に貢献すると考えています。

医薬品セグメントでは、2019 年 10 月、2020 年 4 月に薬価改定を控えています。成長を続けているアレルギー性疾患治療薬「ビラノア」や統合失調症治療薬「シクレスト」のさらなる伸長に加え、インフルエンザワクチンの売上寄与によって増収増益を図っていきます。

Q6:食品セグメントの中国事業は売り上げ成長が加速してきましたが、どのような背景ですか。また中国全体では 100 億規模の売り上げになってきましたが、この規模水準だと利益が出てくると思えますがどのようにお考えですか。

A6:中国では各事業が順調に成長しており、牛乳・ヨーグルト事業については 2018 年度に初めて黒字化を達成することができました。背景にはチルド牛乳の需要が高まっていることが挙げられます。ヨーグルトは甘いタイプの商品が好まれていますので、当社のプレーンヨーグルトについてどのようなマーケティングをすべきか検討しています。アイス事業では、2019 年に新発売した高級アイスを生産拠点のある広州から離れた地域にも展開していく計画です。利益水準に関しては、事業拡大に伴って生産能力増強などの投資も計画しているため、急速な利益成長というよりも、着実に黒字の規模を拡大していきたいと考えています。

Q7:KM バイオロジクスの 2019 年度の計画を見ると、売上高は伸びても増益幅は 1 億に留まっています。新しいワクチンや血漿分画製剤のシェアアップなどが利益水準拡大のポイントになると思いますが、今後の利益拡大のシナリオをどのように考えていますか。

A7:KM バイオロジクスには主にヒト用ワクチン、血漿分画製剤、動物用ワクチンの 3 事業があります。主力のヒト用ワクチン事業については生産体制が軌道に乗ってきており順調です。利益拡大に最も大きな影響を与えるのが血漿分画製剤事業です。不整合問題により一定の影響を受けましたので、シェアの回復が課題となります。今後に向けては新薬の開発のスピードアップを図り、製品ポートフォリオの充実にも取り組んでまいります。

以上